

トップコミットメント&ハイライト

## ハイライト



Highlight 5 社会との関わり

### 社会とのつながりが一人ひとりを成長させる

文化芸術活動への助成、教育支援、植林活動、国際交流。企業はさまざまな社会貢献活動を行なっている。また、こうした社員のボランティア活動の支援制度の導入も進んできていいる。しかし企業はなぜ、こうした社会貢献活動を行なっているのだろうか。富士ゼロックスが社会貢献活動を行なう目的とは――。

#### 長野に舞い降りたアスリートたち

2005年2月26日～3月5日、スペシャルオリンピックス冬季世界大会が長野で開催された。スペシャルオリンピックスとは知的発達障害をもつ人たちのスポーツトレーニングとその成果を発表する競技会を、年間を通じて提供する世界的な活動。150以上の国や地域で、約140万人のアスリート、50万人以上のボランティアが参加している。この長野での冬季世界大会には、86の国と地域、約2,700人の選手団(アスリート約1,900人、コーチ約800人)が集い、日ごろの練習の成果を發揮し、交流を楽しむ8日間を過ごした。



家族と一緒にトーチランにボランティア参加する社員たち

#### ・スペシャルオリンピックスと富士ゼロックスとの関わり

1994年11月	NPO法人スペシャルオリンピックス日本(SON)設立1995年富士ゼロックス端数倶楽部がSON・東京に寄付を開始
1995年	富士ゼロックス端数倶楽部がSON・東京に寄付を開始
1998年8月	第2回SON夏季ナショナルゲーム(全国大会)神奈川大会が神奈川県東海大学で行なわれ、端数倶楽部ボランティア50名が参加
2000年10月	SONに富士ゼロックス社員が出席
2001年2月	端数倶楽部総会にて、全国的にボランティアの参加を進めることを宣言、各地区での活動を開始
2001年2月	SO冬季世界大会の長野誘致を進める会合に出席
2001年2月	SO冬季世界大会アラスカ大会社行会へ参加
2001年3月	代表取締役会長・小林陽太郎(当時)がSO世界大会実行委員会理事就任
2002年5月	第3回SON夏季ナショナルゲーム・東京トーチランに、全国で使用するSOの旗、トーチランTシャツの寄贈を決定
2002年7月～8月	全国でトーチランに参加
2002年8月	第3回SON夏季ナショナルゲーム・東京にボランティアとして参加するほか、大会期間中の機材提供を行なう
2003年6月	アイルランドで行なわれた夏季世界大会にボランティア参加
2004年2月	2004年SON冬季ナショナルゲームにボランティア参加のほか、機材提供を行なう
2004年9月～12月	2005年SO冬季世界大会「500万人トーチラン」分火式に全国の社員が参加
2004年9月	全国各地で「500万人トーチラン」に約1,000名が参加
2005年2月	2005年SO冬季世界大会のスポンサーとして、機材提供を行なう。また、多数がボランティアとして参加

## 生きる元気をもらう

富士ゼロックスプリンティングシステムズの大池千歳は、長野スペシャルオリンピックス冬季大会にフロアーホッケーの審判として参加した。世界大会という大舞台に、審判という勝敗を左右する立場で参加するプレッシャーは相当なものだったが、いくつか失敗もありながら、満足のいく仕事ができただけでなく、大池がフロアーホッケーを知った当初は、自分が世界大会で審判の笛を吹くことはもちろん、こんなに長く関わるようになるとは思ってなかったという。

大池がスペシャルオリンピックスのフロアーホッケーに初めて関わったのは、2002年11月、日本で初めて開催されたコーチ養成の講習会。受講者としてではなく、通訳ボランティアとしてだった。ところが講習会后、大池に通訳にもコーチ免許が渡された。期せずして日本のコーチ第一期生になってしまったのである。



「彼らから生きる元気をもらっているような気がします」と大池

翌2003年夏、大池は東京のフロアーホッケーチームに誘われる。最初は運営への参加を辞退していたが、11月に福岡で開かれた審判講習会兼競技会にチームとともに参加したとき、大池の中で何かが変わった。「練習では見られなかった彼らの真剣な姿を目にして、かわいい！と思ったんですよ。最初はバックに群がるだけだったのが、パスを出せるようになる。神経質でヘルメットやグローブをつけられなかった子が、試合に出たくて頑張っただけでかぶる。『ああ、彼らはできるんだ』とわかったら、ハマってしまった」。その後は2004年2月のナショナルゲームや、長野大会の準備、競技会の開催、世界大会審判の講習会への参加など、精力的に活動を行なった。そして今も、コーチとして月3〜4回、東京チームの練習に参加し続けている。

「正直、休日がつぶれて嫌だな、と思うときもあります。でも練習に行けばやっぱり楽しいし、彼らがひたむきに頑張っている姿を見ると、自分もやる気が出てきますね。これがあるから仕事も頑張れるし、逆にこれがやりたいから限られた時間の中で効率的に仕事ができるという面もあります。このせいで仕事ができないとは言いたくないですから。また、競技会の開催のように、人を集めて仕事を割り振って宣伝をして……という運営の役割は、会社でのプロジェクトリーダーの役割と共通するものがあるって、そういう経験も仕事にいい影響を与えている気がしますね」。では、スペシャルオリンピックスの何に大池はそんなにも惹かれたのだろうか。

「『できない』と言われてきた彼らが、『できるよ』と言われることでどれほど能力を発揮できるようになるか。コーチは決してけなさない、できることを褒めまくるんですね。それが彼らにいい影響を与えていく。時間はかかっても、可能性を信じて待つことで、『できる』瞬間に立ち会うことができる。その喜びや感動から、生きる元気をもらっているような気がします」。

## 体験することで心の壁が取り払われる

長野市在住の長野ゼロックス松本営業部長、角田孝、礼子夫妻はスペシャルオリンピックスのホストタウンプログラムで、韓国チームのアスリートとコーチ2名のホームステイを受け入れた。以前カナダからの留学生を受け入れた経験もあり、不安を抱えつつも夫妻は到着を心待ちにしていた。ところが、2月23日、開会式の2日前に、コーチのキムさんとともに到着したリー・ヨンスク君の振る舞いは、当初2人が想像していた姿をはるかに超えていた。

16歳のリー君の障害は重度の自閉症。他人とのコミュニケーションが非常に難しいのが特徴だ。話しかけても目を合わさず、反応がない。知らない環境に興奮しているのか、ひと時も休まず体を動かし、歯をガチガチ鳴らし、髪の毛をかきむしる。「理解しようと思って見れば見るほど、違いを探してしまう自分がいました。こんなものありえない、という思いが先に立ってかえってわからなくなる。初日はそんな状態でした」(礼子)。

こちらの思いが通じない。どう接していいのかわからない。そんな角田夫妻にヒントを与えてくれたのはコーチのキムさんだった。寛容に受け入れられると、これ以上は受け入れられないというところをはっきり伝える。手を差し延べて助けるのではなく、できるまで見守って待つ。そんなキムさんの姿が角田夫妻にも影響を与えたのかもしれない。「最初は興奮して鼻水が頻繁に出るのが気になったのですが、最後の方ではその鼻水を拭いた手を気にせず握れるようになりました。そうしたら、リー君の態度が少し変わったように感じました。でも、あとでよく考えてみると、変わったのは彼ではなく、私たちの方だったんですね」(孝)。

3日目、角田家を離れる朝、初めてリー君が笑顔を浮かべ、ジェスチャーで試合への意欲を見せてくれた。そして数日後、応援に行なった角田家がリンクで目にしたのは、別人のように凛々しい表情でスピードスケートの試合に臨むリー君の姿だった。「スケートをしているリー君を見なかったら『大変だったわねえ』で終わっていたかもしれません。リー君の格好つけない、ただひたすらに頑張るピュアな姿を見て、人間の持つ素の能力のすごさを思い出したような気がします」(礼子)。

角田家にとって、ホストファミリーは本当に大変な2日間だった。しかし、実際に体験しなければ決して得られない、貴重な何かを得た2日間でもあった。「『こうしてほしい』というこちらの期待を押しつけるのではなく、相手に合わせて待つ、ということを教わりました。今は社会全体が快適さや便利さのために弱い部分を切り捨て、そのせいで皆が暮らしにくくなっているような気がします。お互いの弱さや違いを受け入れ合えるようになれば、私たち自身ももっと優しくいねいに暮らしていけるのに、と強く感じました」(礼子)。「こういった経験で自分の価値観を揺さぶられ、ものの見方が広がることは、普段の自分の生き方や暮らし方まで変えるような気がします。仕事の上でも、例えば上司として部下に接する際に、それぞれ違う個性をどう生かしていくのか、相手の良さや可能性を引き出すためには自分はどう接したらいいのか、ということは今まで以上に深く考えるようになりました」(孝)。



リー君(左から2人目)、キムさん(同3人目)と角田ファミリー

## 社会貢献活動が社員と会社を成長させる

「ボランティア活動を通して社員一人ひとりが成長すること、それが富士ゼロックス自身の成長につながると私たちは考えています」と社会貢献推進室の清水あつ子は言う。「ボランティアの場では、会社では経験できない感動や、違った考えを持つ人との出会いがあります。そのような機会を通じ、それまでの固定観念を壊し、視野を広げて新しい価値観を生み出していける人は、会社の中にも新しい発想をもたらしてくれます。また、自分の思いや感動を人に伝え、人とともに働いていこうとすれば、自然に自己表現や計画実現のためのスキルが鍛えられます。それはまさにビジネスの場でも通用するリーダーの育成につながるものです。自ら社会に出て、感動し、啓発され、成長する。そんな自律かつ自立した社員の育成を目指しています」。

清水は続ける。「課題は、関連会社も含めた社員のボランティア支援制度の整備です。より多くの社員に、このような機会を提供していきたいと思っています」。もっと暮らしやすい社会を作るために、企業を離れた場で自分の力を発揮し、鍛えられ、視野を広げていく。社会貢献を通じて成長するそんな強い、やさしい、おもしろい社員たちの存在が、より強い、やさしい、おもしろい会社を作り上げていく。社会のために、誰かのために頑張ることが結局は一番自分を成長させる。それは個人でも企業でも変わらない。そのことを富士ゼロックスは知っている。

## ■ 社員のボランティア支援制度（富士ゼロックスおよび一部関連会社）

### <端数倶楽部>

1991年12月に会員募集を開始。富士ゼロックス社員、役員、退職者有志によって、自発的、自主的に運営されているボランティア団体。毎月の給料と各期の賞与の「端数」（100円未満の金額）に、個人の自由意志による拠出金をプラスして福祉、文化・教育、自然環境、国際支援の4分野で、その資金を有効に役立てている。

### <主な活動>

#### (1) 自然環境保護分野

里山の保護、自然観察会の開催など

#### (2) 国際支援分野

カンボジアに学校建設を行なうなど、アジア地域の草の根活動をするNGOの支援

#### (3) 文化・教育分野

障害を持つ人々の芸術活動支援など

#### (4) 社会福祉分野

スペシャルオリンピックスのサポート、福祉施設の製作品プレゼントなど

### <ソーシャル・サービス制度>

社会福祉施設や青年海外協力隊などにおいて社会奉仕活動をする場合、3カ月から2年の範囲でボランティア休暇を申請し取得することが可能。休職期間中は、給料・賞与相当額が援助金として支給される。

### <ボランティア休暇>

月間5日までなら積立休暇（使用期限が過ぎて失効した有給休暇最高3年分を積立てたもの）を使って短期のボランティア休暇を申請・取得することが可能。なお、この積立休暇はボランティア活動以外にも家族の介護や私傷病による病院の通院などにも使うこともできる。